

小児の転落予防における付き添い者への効果的な説明の検証 ～付き添い者の意識や行動に焦点をあてて～

キーワード：小児、転落予防、付き添い者、意識、行動

○ 江口 緑 (西入院棟5階)

I. はじめに

A病棟での転落事故は過去3年の年間平均で4件発生しており幸いにも重大な事故には至っていない。しかし、小児の転倒転落事故に関する影響度は、一過性の中等度の影響が見られ簡単な処置や治療を要するものが全体の60%を占めるとの報告¹⁾があり、A病棟でもこのような事故が起きるとも限らない。先行研究においては、「保護者の事故防止に対する知識は不十分で、事故や事故防止方法に関する情報不足」²⁾や、「危険だとわかっているが柵を上げるのが面倒」³⁾という、行動に移すことが難しい現状が明らかとなっている。昨年A病棟で起きた転倒転落のインシデントの要因分析において、「患者への説明が不十分だった」とするものが8割以上に認められたことから、付き添い者の転落予防行動に結びつけるような説明を行うことができるかが大変重要である。これらのことから、具体的な転落防止場面や防止方法を視覚的に付き添い者に訴えることで、転落予防行動に結びつけることができるのではないかと考え、介入を行い、転落予防行動に結びつけるための一助を得ることができたためここに報告する。

II. 研究目的

具体的な転落場面や転落予防行動を記載した視覚的教材を作成し、付き添い者に説明を行うことで、転落予防行動に結びつけることができるかを検証し、転落予防に関する看護について検討する。

III. 用語の定義

意識：危険な場面で、ベッド柵を上段にするなどの転落事故防止のための心がけ

転落予防行動：付き添い者がベッド柵を上げること

IV. 研究方法

1. 研究デザイン：質的研究

2. 研究期間：平成24年11月（一ヶ月間）

3. 研究対象者：5ヶ月～2歳以下の入院患児の付き添い者10名

（患児の年齢は先行研究で転落発生リスクが高いとされており、またA病棟で昨年発生した転落事故のすべてに該当するため選定した。上記患児は対象年齢5歳未満の縦101cm×横200cm×高さ150cm床面からマットまでの高さ70cm、柵が中段時の高さ90cmの小児用ベッドを使用している。）

4. 研究方法

1) 発達段階別に具体的な転落場面や転落予防行動を記載した視覚的教材を作成し、従来より使用していた病棟オリエンテーションのパンフレットに入れる。

2) 作成した視覚的教材を用いて説明に偏りが無いよう、研究者が5ヶ月～2歳以下の入院患児の付き添い者に対し説明を行う。

3) 児の入院日、入院3日目、入院5日目に、1日計3回の訪室時の状況から転落予防行動がとれているかを、チェックシートを用いてチェックを行う。

4) 付き添い者に対し転落予防に関する意識を捉えるためのアンケートを実施するとともに視覚的教材自体に関する意見や感想を聞く。

5) 分析方法：視覚的教材を用いた説明の効果と、付き添い者の意識や行動の変化や程度を対象者の収集データと関連づけながら分析した。

V. 倫理的な配慮

研究計画書と、研究対象者への説明書、同意書は看護倫理委員会の承認を得た。対象者へは、研究の参加は任意であり参加の有無に関わらず、児の治療には不利益は一切生じないことを説明した。また、アンケートで得られたデータは個人が特定されないよう処理を行うことを口頭、および文書で付き添い者に説明し、同意を得た。

VI. 結果

1. 研究期間中の転落事故件数は1件（研究対象者以外の患児）であった。事故の概要は3歳

1歳2ヶ月の児がベッドの端に腰掛け食事を行っていた際に母親が目を離した瞬間に転落したというものであった。

2. 表1に対象者の属性、表2に付き添い者の意識や行動について示す。意識は、常時両柵上段にする必要があると答えたDが一番高く、その他は自分が一緒にいる際に、子供側の柵は上段にするが親側の柵は下段～中段にするという回答であった。行動については、D、E、Hは特に十分に予防行動がとれており、A、F、I、Jの予防行動はまずまずとれているといえた。B、C、Gの行動化はやや不十分であった。

Ⅶ. 考察

1. 付き添い者への説明の効果

転落予防の説明を行った際、付き添い者から「こんなことが起こるのですね。」や「気をつけなければいけない。」などといった言葉を聞くことができ、相槌の打ち方や表情からも、視覚的教材が無かった以前と比べて、よく伝わったのではないかという研究者自身の印象があった。また、研究対象者の方がそうでなかった者と比べて訪室した際の転落予防行動がより行っていた印象だったという病棟スタッフの声を聞くことができた。この理由として対象患児が転落しやすい成長過程にあることを説明し、入院患児と見合った発達段階の柵から説明し他人事ではないことを印象づけたことが影響していると考えられる。本木らが、「児の身体的・精神的特徴を付き添い者が理解した上での転落防止意識が必要である」⁴⁾と述べているように、対象患児は転落しやすい発達段階にあり、発達段階別に起こりやすい事故場面を示した教材は効果的であったといえる。また、付き添い者も無効回答を除く全例が「わかりやすい」と答えており、その理由も「写真があるため」という回答が多く、写真を用いて視覚的に訴えることはよりイメージが付きやすく効果的であったといえる。しかし、期間中に研究対象者以外で転落事故が1件発生したことから、同じ教材を用いても、説明を行う者が異なると付き添い者の転落予防行動に影響することがいえる。転落事故の発生には様々な要因が複雑に絡み合っているが、説明の方法や言い方で大きな差がでないよう、事故に至りやすい傾向や、状況、背景をスタッフ間で共有し、加えて患者の個別性を踏まえ説明のタイミングや所要時間を考慮することが重要である。作成した視覚的教材については、一方でもう少し簡潔にし、発達段階別にインデックスをつけた方がよいと

の意見もあった。A病棟では緊急入院の場合が多いため、簡潔にかつ危険性をわかりやすく訴えられるように今後検討を行いたい。

2. 付き添い者の意識

付き添い者の「自分がいるから大丈夫」との理由で親側の柵を下段～中段にするという回答が無効回答を除く90%に認められ、またAに関しては「転落に関しては自分の責任である」との記載があった。杉本らは「親は家庭で日常茶飯事にみている転倒を入院中にも大事に至らなければ問題がない」¹⁰⁾と述べておりまた、村越らは「子供の事故は親の責任、という抽象的な指導ではなく、事故はヒトに被害をもたらす健康問題として科学的にアプローチする必要がある」¹¹⁾と述べている。従って転落することでの子供への影響をより詳細に示すと同時に、転落後の観察の必要性を視覚的教材に強調して示す必要がある。また、転落経験が8割の家庭にあったことから、入院中に関わらず、家庭での親への安全面についての教育も大変重要である。

3. 付き添い者の行動

行動化の割合が高いD、E、Hの注目すべき背景要因として3例のうち2例がA病棟での入院経験があり、3例とも児本人がベビーベッドからの転落経験があった。その他、食事用の椅子があると良い、ベッド柵にカバーが欲しい等、病棟内の安全管理に関する気づきが多く、特に意識が高かった。「入院歴があると柵上げ行動を行う割合は初回入院とほぼ変わらない傾向にあることに対し、慣れや過信から10%の割合で柵上げを行わなくなるという結果がある」⁵⁾が、入院歴があった2例の転落予防行動は十分であった。この理由として、ベビーベッドからの転落経験や前回入院時のベッド柵の操作の経験は、行動変容の要素の中での「学習」としてとらえることができるため、意識や行動に結びつきやすい結果になったと考える。従って入院経験の有無は良くも悪くも転落予防行動に影響を与えることがいえる。

また、転落歴がある群の中では、兄弟がいて同胞順位が後にあるB、C、Gが意識が低く行動化が不十分であった。この理由として濱が、「特に女兒や子供の同胞順位が後で、有職者や複合家族において母親の事故防止度が低く、その理由は育児経験による安心感や母親の事故防止度が十分でなくとも、育児施設や他の大人に子供の安全が守られることがあげられる」⁶⁾と述べている。今回は同胞順位が後になるほど事故防止度が低い傾向にあることと一致した。

これらの傾向は転落予防に関しても言えることであり、特に注意をして説明する必要がある。

今回、入院歴や転落歴等を具体的に聞き取り、その有無や内容によって意識や行動に差が出ることがわかった。卯内らが、「家族の危険認識を加味することはスタッフが感じる転倒転落に関する危険度とのずれを少なくすることができ、転倒転落を予防することができる」⁷⁾と述べているように、家庭での安全管理に対する意識を把握することは、転落予防に関する看護介入に役立てることができるといえる。

付き添い者から得られた安全管理に関する気づきから、付き添い者が不便さや危険性を少なからず感じていることが分かる。関根らが、「母親がベッド柵を不便と認識しないよう工夫する必要がある」⁸⁾と述べているように、ベッド以外での環境を整え柵上げ行動を不便だと感じないような環境整備が重要だといえる。内容によっては実現可能の可否はあるが安全で快適な入院生活を送ることができる様、可能な範囲で配慮する必要がある。

また、転落歴がある8例の中で、ソファやベッドの下に絨毯や柔らかい敷物を敷いている例が約60%の家庭にあり、もしも転落しても衝撃が最小限になるような家庭での心がけがされていた。病院での転落予防に関して、研究者自身は「転落しないように」という考えに固執していた。現段階では、家庭でされていた様な対応は困難であるが、万が一ベッドから転落したとしても衝撃を最小限にできるような環境整備の視点も必要である。

転落予防行動に関して注意を促されたA、G、I、Jでは、継続的な指導を行った結果、行動に化につながった。藤原らが、「繰り返しの指導は意識変容につながる」⁹⁾と述べているように、継続的な指導は転落予防行動につながるといえる。また、行動変容につながる要素の中で自己効力感を高めることがあげられるが、その中での社会的説得も有効である。今回は継続した指導の有無と結果に焦点をあてたが、転落予防行動がとれていた際は適切に評価することで、社会的説得が得られ自己効力感を高め、持続した転落予防行動につながると考える。

VII. 結論

1. 転落しやすい発達段階にある児を持つ付き添い者に対して、視覚的教材を用いた転落予防の説明は効果的であった。
2. 個別性を踏まえ説明を行うタイミングや所要時間を考慮することが効果的な説明につな

がる。

3. 入院経験の有無は、転落予防行動にプラスにもマイナスにも影響を与え、同胞順位が後になるほど転落予防行動が取られにくい傾向にある。

4. 転落予防に関して継続的に注意を促すことは転落予防行動につながる。

IX. おわりに

今回の研究手法では介入群と非介入群に分けて介入することは倫理的観点から実現が困難であり、歴史的な比較も困難であったためどの程度の割合で有効性があつたかが言い難い。また、転落件数は年間平均で4件と数が少なく、今回は研究対象者も少なかったため、意識や行動から事故に至る因果関係や傾向を明確にすることは難しかった。今後は研究期間を十分にとり、より多くの対象者で検証する必要がある。

【引用文献】

- 1) 千葉正博他：小児病棟におけるインシデントレポートの検討 小児外科 42 巻(1 号) p31-35 2010
- 2) 石井博子他：保育園における自己防止プログラムの開発 保育と保健 52 号 p43-45 1996
- 3) 福田由貴子他：サークルベッド柵を上げる行動に関する付き添い者の認識 日本看護学会論文集小児看護 36 巻 p231-233 2005
- 4) 5) 本木紘子他：小児科病棟における転落防止に関する付き添い者の意識調査 日本看護学会論文集小児看護 37 巻 p269-271 2006
- 6) 濱耕子：1 歳 6 カ月児にみる事故発生と家族背景、母親の日常の事故防止度との関連 日本看護学会論文集小児看護 36 巻 p324-326 2006
- 7) 卯内かおり他：小児の転倒転落アセスメントスコアシートの改善 小児看護 36 巻 p50-52 2005
- 8) 関根和美他：転落事故防止を家族へ効果的に呼びかける方法 群馬小児保健 65 号 p18-19 2007
- 9) 藤原吉利子他：小児の転落事故対策 西脇市立西脇病院誌 6 号 p55-69 2006
- 10) 杉本陽子他：入院中の子供の転倒転落した場合の責任範囲の受け止め 三重大学医療短期紀要 3 巻 P11 1994
- 11) 村越真：子どもたちには危険がいっぱい 山と溪谷社 p134 - 135 2002

表1 対象者の属性

収集データは①子供の年齢 ②付き添い者の年齢 ③付添者の職業 ④家族構成 ⑤入院歴 ⑥ベビーベッドの使用の有無 ⑦家庭での転落歴である。

①子供の年齢 平均年齢：0歳9ヶ月(最小値0歳6ヶ月-最大値2歳2ヶ月)、男女比=5:5

②付き添い者の年齢 平均年齢：29.2歳(最小値22歳-最大値41歳)

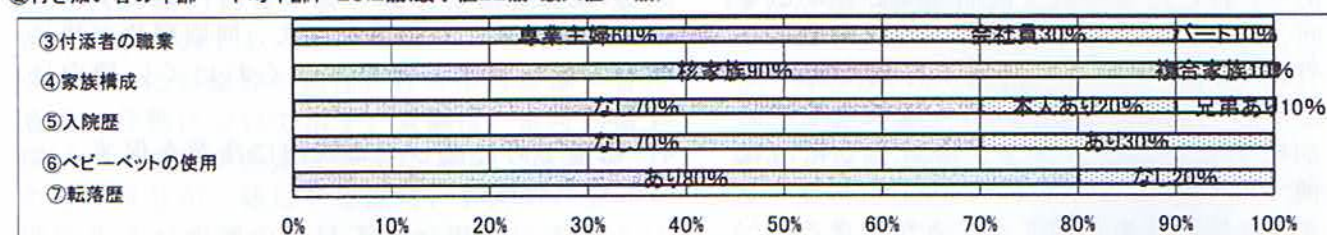


表2 付き添い者の意識と行動

対象者	収集データ	⑦転落歴と対策	意識について	行動について(柵の状態)	特に意識していた心がけ、視覚的教材や説明に対して、その他自由記載
A	① 1-0歳(男)	なし	自分がいるから大丈夫、乗り降りの際不便という理由から、子供の就寝時や起床時に関わらず自分が側にいる際は、親側は中段にするとの回答(子供側は常時上段)。	入院日は両柵とも下段までとなっていたが注意を受けた結果、3日目以降は両柵とも上段まで上がっていた。転落予防行動はとれているといえる。	「転落に関しては親の責任である。」と記載あり。パンフレットは「写真があるためわかりやすい。」と回答あり。
	② 24歳				
	③ 会社員				
	④ 核家族(兄弟なし)				
	⑤ なし				
	⑥ なし(布団)				
B	① 0-7歳(女)	兄弟、本人あり(ベットの一方を壁側につける、ベッドの下に布団を敷く)	無効回答	子供側の柵は上段まで上げられていたが親側の柵は中段となることが多かった。兄は立ち上がりまで可能であったため、転落予防行動はやや不十分である。	無効回答
	② 30歳				
	③ 専業主婦				
	④ 核家族(同胞3番)				
	⑤ なし(兄弟あり)				
	⑥ なし(ベット)				
C	① 0-6歳(女)	兄弟あり(ベットから転落)→(対策:ベットを壁につける)	ベットからの乗り降りの際の不便さや、圧迫感、少しの間なら大丈夫、という理由から、子供の就寝、起床に関わらず子供側は中段、親側の柵は下段(部屋から退出する際は中段)との回答。	子供側は常時上段であり、親がベット周囲にいる時の親側の柵は中～下段となっていた。兄は寝返りのみであったが日々成長していることを考えるとやや不十分といえる。	パンフレットに関しては、「わかりやすい」と回答あり。
	② 24歳				
	③ 専業主婦				
	④ 核家族(同胞2番)				
	⑤ なし				
	⑥ なし(ベット)				
D	① 0-11歳(男)	本人あり(寝がえりしてベビーベッドより転落)→(対策:ベビーベッドの下に布団を敷く)	危険であるとの理由で、どの場面でも柵は上段にする必要があるという回答。	入院日から、入院5日目を通して、柵は常時上段まで上げられていた。転落予防行動は十分とれていた。	「動きが活発なため1つ1つの動作を注意して見ていた、なるべく寝かしつけてから自分のことをしていた」回答あり。パンフレットはわかりやすく、より注意できた。「家でも同じ事に気をつけている。柵カバーが欲しい」と回答あり。
	② 31歳				
	③ 専業主婦				
	④ 核家族(兄弟なし)				
	⑤ 本人あり(当院)				
	⑥ あり				
E	① 1-5歳(男)	本人あり(ベビーベッドより寝返りして転落)→(転落してからはベビーベッドは使用せず)	親がベット周囲にいる時のみ自分がいるから大丈夫との理由から、子供の就寝、起床時に関わらず、親側の柵は中段、子供側は上段との回答。(その他は両柵上段)	入院日から入院5日目を通して、常時柵は上段まで上げられていた。転落予防行動は十分とれていた。	パンフレットに関して、「読みやすく、わかりやすかった。説明の長さも調度良かった。年齢別の記載であったのでインデックスがあるととても良いと思う」と回答あり。他、「柵をあげてもテレビが見やすい位置にあると思う」と回答。
	② 28歳				
	③ 会社員				
	④ 核家族(兄弟なし)				
	⑤ 本人あり(当院)				
	⑥ あり→なし(ベット)				
F	① 0-6歳(男)	なし	親がベット内にいる時のみ、自分がいるから大丈夫との理由から、子供の就寝、起床時に関わらず、親側は下段、子供側は上段との回答(その他は両柵上段)	子供側は常時上段で、一度親とベットで就寝している時に親側の柵が中段となっていたが、その他の場面では両柵とも上段まで上げられていた。予防行動はとれている。	「自分の手の届かないところでは、柵を上げるようにする」との回答。パンフレットは、「写真がついていたのでわかりやすかった。最初に聞いていてよかった」と回答。
	② 27歳				
	③ 専業主婦				
	④ 核家族(兄弟なし)				
	⑤ なし				
	⑥ なし(布団)				
G	① 2-2歳(女)	本人あり(少し目を離した時に駅のおむつ交換代から転落)→それ以降注意するようにしている	無効回答	入院日より、子供が嫌がるのとこととで両柵とも下段になっており、注意を促し、3日目には子供側は上段となった。しかし親がベットから離れる際、親側は下段となっており予防行動は不十分であった。	無効回答
	② 22歳				
	③ パート				
	④ 複合(兄弟なし)				
	⑤ なし				
	⑥ なし(布団)				
H	① 1-1歳(男)	本人あり(ベビーベッドから転落)→(対策:ベビーベッドの下に布団を敷いている)	乗り降りが不便なため、子供が就寝して自分もベット内にいる時のみ、親側を下段にするとの回答。(それ以外の場面では、両柵とも上段との回答)	入院期間を通して両柵とも常時上段であった。転落予防行動は十分とれていた。	「説明時に危険を感じたため、子供が起きている時は必ず上段にする」という心がけあり。パンフレットに関して、写真が多く危険性がよくわかるものの、少し字が多かった。他、「お血を取るときに一瞬目が離れるため両サイドがガードされた椅子が欲しかった」と回答。
	② 28歳				
	③ 会社員				
	④ 核家族(兄弟なし)				
	⑤ なし				
	⑥ あり				
I	① 0-8歳(女)	兄弟あり(家のソファから転落)→(対策:下に絨毯を敷く、床面が低いベビーベッドを使用)	無効回答	子供側は常時上段であり、入院日に親がベットサイドにいる際に親側が中段であり注意を促した結果3日目から常時両柵とも上段であった。転落予防行動は十分とれていた。	無効回答
	② 37歳				
	③ 専業主婦(元Ns)				
	④ 核家族(同胞3番)				
	⑤ なし				
	⑥ あり(床面が低い)				
J	① 1-1歳(女)	本人あり(家のソファから転落)→(対策:下に柔らかい敷物を敷いている)	圧迫感や乗り降りの際不便という理由から子供の就寝、起床時に関わらず自分がベットサイドやベット内にいる時のみ親側は下段～中段との回答であった。(その他は両柵上段)	入院日に子供側の柵も中段、親側は下段となっており、注意を促した。入院3日目は子供側は上段となったが親側は下段で、注意を促した結果、入院5日目には両柵とも上段となった。	「よく動くため子供から目を離さないようにしていた」と回答あり。パンフレットは、「写真がありわかりやすかった。」と意見あり。他、「ベットの上げ下げの操作が難しかった。」と回答。
	② 41歳				
	③ 専業主婦				
	④ 核家族(兄弟なし)				
	⑤ なし				
	⑥ あり→なし(ベット)				